

死にたくない

ウィレン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

石で躓いて赤ちゃんに生まれ変わった坂本さん

死にたくない、生きたいが為に力を身につけて日々奮闘する話。

目次

生まれ変わって	1
喧嘩？	7
真奈のココロ	13
初めまして・・・	19

生まれ変わって

転生、って本当にあるんだな。

けどさ、普通は死んで生まれ変わるもんでしょ？

なんで死んでないの？いや、死にたいってわけじゃないけどさ、普通はさ、なんていうか、

……………死ぬもんでしょ？

なんで転んだだけで赤ちゃんになってるの？

転んだだけだよ？石で躓いただけ

どれだけ疑問を抱いて、どれだけ腹を立てようと時間は進む様で、生まれ変わってなんやかんや（思い出したくもない）、時が経った。

精神年齢二十歳の私は泣きたくなるような日々を過ごした。実際に泣いたけど。

前世の記憶を持って生まれてきたせいで苦勞が絶えなかった

3年ほど、私は人には言えないあーんなことや、こーんなことまでされた。生まれた時点で生き恥を晒して生きてきた。もう人生諦めてるようなもんだ。プライドとか全部へし折られて、何度自殺まがいな事をやろうとして何度止められただろうか。

晒しに晒しまくられた結果、メンタルだけが異様に強くなった。

そのせいで表情筋が発達してない。心が死んだと同時に表情筋も死んだらしい。毎朝鏡の前で練習してるけど一向に動く気配はしない。

一回だけ、父さんに見られたことがある。何やってんだ気持ち悪い、なんて5歳の幼女に暴言吐きやがった。なんてこと言うんだ。こっちは一生懸命やってんだ。やりたくなくともやってんだ。

その日を境に私は、日々の恨み辛みを全部父さんに八つ当たりして、〃親父〃と呼ぶようにした。

普段冷静な親父がシヨックを隠しきれずにいて、仕事もままならなるところを見た私は思いつきり鼻で笑ってやった。それを見て余計落ち込んだ。母さんはそんな親父をなんとか慰めようとした。慈悲深い母さんにはとてもそういう姿は見せられない。私は心配しているふりをして優越感に浸ることができて、これ以上ない、いつときの幸せを掴んだ。

たったの、いつときだけど、

更に数年経った

私はここがなんの世界か知って絶望した

「おーい 坂本！早く来なよ!!」

友達一号の有沢たつき。通称、たっちゃん。

無愛想で子供に見えない私を誘って遊んでくれた心優しい女の子。

しかし、その前に……………

聞き覚えのあるのは名前なのは気の所為か？

前世、私は多くの漫画を読んでいた。それはもう沢山。200冊以上は読んだんじゃないかな。その漫画の1つに、“BLEACH”と言うものがあった。死亡フラグしか立たないような世界だ。主人公の死神がバツサバツサ敵を倒していく物語。見るだけなら申し分ないが、生まれ変わるとなると話が違う。

選りに選ってなんでここなんだ

BLEACHの世界だから、虚ホロウが存在する。見えないうってことは私は霊感ゼロか。いや待て、私死なない？魂魄を狙うモブ虚とか現世に来た破面アラソカルとかその他いろいろ、危険しかないんじゃない？私早めに死ぬ。明日まで生きられる自信を無くしそう。

平穏な日々を送りたい、

私は生きたいんだ、

死にたくない

その為に、まずは主要キャラと適度な距離を保った方がいいか。近過ぎれば苦勞の絶えないものになる。将来不良になる主人公。そんなのと仲良くしたらどこぞの不良に恨み買われて誘拐でもされそう。しかし幼馴染というポジションは絶対の様。

現在、小学一年生。

体育は外でやるから友達と一緒に外に出る。

その友達っていうのは、たっちゃんのこと。

たっちゃんの右隣を歩く黒崎一護

たっちゃんの左隣を歩く私

……………これから存在感を無くしていこう。黒崎一護から見た私はたっちゃんの友達つてだけだろう。後、すごい無愛想なひと、ぐらいか。徐々に離れていって、クラスメイトぐらいの認識になれるようにしないと。

ああ、それから私は虚から身を守る術を見つけないといけない。

今のままじゃ確実に死ぬ。私が何らかの能力を持つことができたとして、その後を考えないと。もしも浦原喜助や藍染惣右介に目を付けられた場合の対処法など。まあ、今はいい。

私がどのようにして能力を手に入れるのか。そして力を手に入れるタイミング。最重要事項

いくつか原作を頼りにした方法があるがどれもリスクが高すぎる。うまく力を手にできるか正直いってあまり自信がない。今の時点では力を手に入れない方がいい。

数年後に黒崎一護の母親を殺す何とかフィッシャーに殺されるか

もしれない。コントロールがその時点で出来ていなかったら常に虚から狙われ続ける。そして力を手に入れても、それを使いこなせなければ意味は無い。

もし手に入れるとするなら、原作開始後が丁度いい。

危険は増すが力を手に入れたことが周囲にバレたとしても、何も疑われない。なぜならその時黒崎一護という桁外れの霊力を持った人物が存在するからだ。皆彼にばかり視線がいき、彼の影響で私が力を手に入れたと思ひ込むはずだ。

浦原喜助ですら知らない

藍染惣右介、市丸ギン、東仙要だけが知る。

“崩玉の力”

藍染惣右介は滅却師クインシーと死神の間に生まれた黒崎一護をずっと見張っている。原作開始と同時に黒崎一護、朽木ルキアに近づけば不審に思い私が疑われかねない。

さっきの言葉は撤回した方がいいか、黒崎一護とは友達になる。主要キャラにはどんどん関わるようにしよう。多少情が移ったくらい構わない。それで私が生きる為に支障は出ない。

喧嘩？

さて、仲良くなるうつつというけど、どうしたもんか。仲良くつて、どうすればいいんだっけ？結構な間ひとりでいた所為かそれが普通になつたみたいだ。前世も自分から友達を作るってことはほとんど無かつたし。

「坂本、何悩んでんの？」

たつちゃんに声を掛けられて一瞬動きが停止した。こんなこと聞かれるとは思ってなかつたから、そもそも気づかれたことに驚いた。

「・・・何で悩んでると思ったの？」

私がたつちゃんに聞くと頭を捻り考えてる。ポーカーフェイスは得意、無表情だからあんまり分かんないと思つてただけだな。何で分かつたのか疑問だ。

「うくん、・・・何でって言われてもなあ・・・何となくだよ」

は？

いやいや、何となくで分かつてもらつちや困るんだけど。これから生きていく為にポーカーフェイスは必ず必要だから（いろんな意味で）それを今まで練習してきたのに。どうしたら感情を隠せるか改善点でもあんのかな。

「坂本は無表情で何考えてんのかさっぱりだけど、雰囲気？かな。それに悩んでるときって、楽しそうに見えるんだよな」

楽しそう？何言ってるんだ？

私はついに動きを止めた。楽しいなんて考えた事無い。たつちやんがそう感じているだけとは考えにくい。漫画・アニメの中でのたつちやんはなかなか洞察力があったし、人を見る目だっけって持っている。だとしたら私は無意識の内に「楽しい」と感じてることになる。何があつてそう感じてるのか。考えたところで答えは一向に出てこなかった。

「大丈夫？坂本。あたしなんか悪いこと言つた？」

「大丈夫」

そう言つて歩き出せば何故か気まずい空気になっていた。溜め息が溢れそうになり慌てて引込める。友達って、面倒なものだ。他者の気持ちを考え、思いやるのは一番苦手だ。

「たつちやん、」

「な、なに？」

「相談があるんだけど、」

瞬間、たつちやんが石のように固まって動かなくなった。余程珍しかったんだろう。まあ私が相談なんて一言もしたことなかったし、つい最近まで離れようと思つてたから、当然といえば当然の反応だ。ひらひらと右手を振るが反応無し。

こうなつたら仕方ない。なにも反応しないたつちやんが悪いんだし。私はランドセルの隙間に挟まつてる物差しを出して、両手で持つて頭上に高く上げた。そして、たつちやんの頭を力の限り叩いた。子供だからそう痛くないと思うけど、

「!?いったあああ!!!」

大き過ぎる声に通行人がこちらを見たが、何事も無かったように通り過ぎる。どうせ子どもがはしゃいでるだけだと思っただろう。苦痛に顔を歪めて頭をさするたっちゃんを見て少しやり過ぎたかもと後悔する。やった事に対して全く後悔は無いけど。私は物差しをランドセルの隙間に戻して、たっちゃんに近づく。

「相談があるんだけど、」

「二回も言わなくても聞こえてるよ!!何で物差しで叩くんだよ!!」

涙目になりながらも、きつと睨みながら聞いてくるたっちゃん。反応しないたっちゃんが悪いでしょ。

黒崎一護と仲良くなるには彼女が一番近い存在だと思われる(家族を除いて)。髪色とかで幼少は色々言われていたみたいだから、変に物怖じしないたっちゃんは黒崎一護にとって大切な人間に値するだろう。

たっちゃんからの紹介は黒崎一護にとってかなり信頼があるものだ。口では色々言っているけど心ではそう感じていない筈だ。…多分。

「黒崎一護、」

「一護がどうしたの？」

「彼と友達になりたい」

「はあ?!?!」

大袈裟だ。無駄にうるさい声に耳を塞いだ。そんなに驚く要素が

どこに、ああ、あったか。子供はつくづく面倒極まりない。私も見た目は子供だけど、中身はすっかり成人した女である。たっちゃんも身体的な面ではまだまだ餓鬼。これから成長するからいいだろうけど、精神的な面では人より幾分か短気な所為なのか余計幼く見える。あくまで私の主観の話ではあるが。

黒崎一護と仲良くなる為にわざわざ本まで買ったんだ。これは失敗してもらっては困る。たっちゃんが黒崎一護を紹介することを嫌がるとは思えないから、成功は7割程だ。

『悪い人間が友達を作る10の方法』

という本を買った。母さんは滅多に我儘を言わない私をどこか心配していたけど、本を買って欲しい、と言うと嬉しそうな顔をしてオツケーしてくれた。けどタイトルを見た瞬間顔が引き攣って幼児向けの本を紹介してきた。いやいや私そんな子供じゃないし。結局、母さんが先に折れた。こんな子供らしくない子供、普通じゃないと思うところが多々あって、それでも嬉しそうな顔をする母さんには驚いた。いや、驚いた、というよりは感心した。

よく出来た母親だな、と。

税込562円の本を私は見事獲得できた。早速その日に読んで見たが興味深く、夕飯をうっかり忘れるところだった。

「……………なに?」

「なんであいつ?! ってそうじゃない! 坂本、悪いこと考えてない?」

「なんで?」

最近特にたっちゃんの勘が鋭くなってきた。理由は不明。悪いこととは言えないが、似たり寄ったりなことは考えてはいる。

「だってあんた、最近気持ち悪いくらいに距離を縮めてくるから!!」

気持ち悪いとはひどいな。

「距離を縮める?」

「前は離れて行こうとしてたじゃん!名前を苗字で呼んでって、必要以上あたしと関わろうとしなくて、それが何で急に一護と友達になりたいって言うんだよ!!」

.....。

「あたしのことがそんなに嫌ならはつきり言えよ!!!」

何故だろう。彼女の事だからすぐに承諾してくれると考えていたのに。私はたっちゃんでは無く黒崎一護と友達になりたいと考えていたのに、何故たっちゃんの話に置き換わっているの?・

泣いてるたっちゃん、

何で泣いている?

目から溢れそうになる涙を、零さないように唇を噛み締めて必死になって我慢している。

「……………嫌いではない」

私の口からぽつりと呟かれる。

真奈のココロ

「…………え」

涙はすっかり引いて大きく目を見開いていた。
何をそんなに驚くことがあるのやら。

「嫌いではない。たっちゃんのことを “大事” だよ」

この言葉に嘘偽りはない

「!!で、でもっなんで離れようと……………っ!!」

また、たっちゃんの目にジワリと涙が浮かんできた。

有沢たつきはこんなにも泣き虫だったかな。正義感の強い男みたいな性格だった気がするけど、子供だからか？

泣かれたら些か、いや、かなり迷惑だ。私はランドセルから物差しを取り出してたっちゃんに向けて、ビクリと肩が大きく跳ね上がった。どうせ、叩かれた時のことを思い出してんだろう。
これは軽くトラウマになってるな。

「泣き止んで、」

いつもより低い声が出たのはほんの少し機嫌が悪いからだ。威圧的にたっちゃんを見下ろして物差しを持ちながら言った。

お、泣き止んだ

驚くほど早く涙が引つ込みたっちゃんが怯えているように見えた。たっちゃんだし、圧をかけるのが丁度いい。

「貴方の事は大事」

もう一度言う。

「避けていたのは風邪だったから。移らないようにするため。最近治ったから近づいただけ」

「!?うそ、……じゃあ、あたしの勘違い?」

信じられないとでもいうかのように、口をあぐり開けて驚いている。彼女は早とちりし過ぎだ。

「それに、」

「それに?」

首を傾げて聞いて来るたっちゃんに爆弾投下

「貴方が休んだら誰がプリント届けると思ってるの」

そう言った瞬間、カチン、とたっちゃんが固まった。

本当に、ね。残念なことになったっちゃんと私の家は近い。本当に残念。たっちゃんはこれまで一度も休んだことはないけど、万が一ということも有り得る。

「なんだよそれ!結局あたしのことバカにしてんじゃん!!」

馬鹿にした覚えはない、馬鹿だとは思っているが。まあ、これでいつもの調子に戻ったか。面倒になる前に話を逸らそう。

ギャーギャー騒ぐたっちゃんに一言、

「黒崎一護、彼と友達になりたい」

むくれた表情をしている。が、目はすっかり私を向いていた。さつきみみたいな煩いことにはなりそうにはない。

「…………た、」

「聞こえない、いつもの馬鹿元気は何？」

必要以上に煩いのに、こんな時だけに恥ずかしがってんだか。彼女のどこに恥じることがあるというんだ。常日頃から煩い彼女が。

「なっ!?馬鹿元気ってなんだよ!あたしはっ、”わかった”って言ったんだよ!!」

「そう」

「反応薄っ!!!」

うるさいな、

私はたつちゃんから逃げるように早歩きをする。後ろから待てよ!、と聞こえるがそんなものは無視だ。

「ねえ、坂本」

突然、らしくもない無理に作ったような笑った顔をすするたつちゃんをちらりと見るが帰る方向へと足を進める。

「…………あたしと坂本は、友達だよね」

私は無意識の内に目を細めていた。

？何故聞いてきたのか分からないけど、そうだね、と答えておいた。何故彼女がそんなに不安そうなのか私には分からない。どんな感情なんだろう。不安になるって、

「坂本！またな」

!!

いつの間にか分かれ道まで来ていた。たっちゃんも右に曲がり私はそのまま真っ直ぐ行く。口角が緩み声も若干高い。

「……………うん、また」

たっちゃんには聞こえているのか分からない大ききさで言って、見えなくなるまで呆然と彼女を見ていた。あんな言葉のどこが嬉しいのか。

数分歩いて家へ着いた。

ガチャ、と玄関のドアを開けると母さんが迎えてくれる。

「おかえりなさい、真奈ちゃん」

「……………ただいま、」

目を子供のようにキラキラ輝かしている。純真無垢な母さん。そんな目で見られると私が直視できない。

私の今の母さんは良い人すぎる。そのうちどっか悪い商売人に引っかけりそうで怖い。

「あ！お隣の山川さんにケーキを貰ったんだけど、食べるかしら？」

「うん、食べるよ」

「ミルフィーユとショートケーキ、どっちが食べたい？」

母さんはミルフィーユが好きだったな。

「ショートケーキ」

「分かったわ、今用意してくるからランドセル置いて待っててね」

「ん、わかった」

二階にある自分の部屋にランドセルを置いてくる。

その間にも、私はショートケーキよりもたっちゃんのことを気になっていった。正確には、たっちゃんの心理が気になっていた。私は

さっぱり分らない、

私は人並みの感情を持っているが、それが常人より極端に乏しい。今だって、たっちゃんが何に對しそんな感情を抱いているのか分からない。どうしてそういう感情になるのかも。

どうでもいい人であれば、感情なんて気にはしないが、たっちゃんは別だ。彼女を利用して黒崎一護等に近くのためから。それに、

たっちゃんと黒崎一護は根本的なところが似ている。

仲間思いだとか、正義感が強いだとか、短気なところとか、優しすぎるどころも、他にもたくさんある。

同類だから合わないところだとか色々あると思うけど、私がいい感じにストッパーになってその間に入ったら、より早く仲良くなれる気がする。要するに仲介人になるってことだ。

これからのたっちゃんとの付き合い方で、私の運命が変わる。黒崎

一護に誰よりも近い存在になるために、たっちゃんは必要不可欠な人。それ程までに私はたっちゃんが

“大事”なのだから。

「真奈ちゃん！ケーキ食べるわよ？」

母さんの声でハツとなり急いで二階の階段を降りる。

その時私は、無意識にも自分の口角が上がっていたことに気づかなかった。

初めまして……

日曜日

「貴方が黒崎一護？」

オレンジ色の髪の毛の少年。

隣でたっちゃんが不服そうだけどそこは気にしない。ついに運命の日、大袈裟に聞こえるがそれほどに大事なことだ。かなり緊張していたけど、私が思っているような心配はないと思われる。

あの後たっちゃんから電話で早々黒崎一護と会う約束をした。私は弓沢児童公園にいる。未来、黒崎一護が二度目の虚を倒し、決意を固める場所でもある。

昼過ぎ、騒がしい子供がうじゃうじゃいる。不愉快極まりないが学校よりはマシだ。ここで我慢する方がよっぽど楽だ。眉間が寄りそうになり（実際全く表情はビクともしていないが）ぐっと堪える。

「そうだけど……君は？」

不思議そうに聞く黒崎一護があんな風に成長するとは、誰も思わないだろう。こんな元気な少年があんな不良になるとは、

私がい出し限り、黒崎一護は甘い人間だ。それは精神が完全な発達を遂げていないせいもあるが、母親が一番深く関わっていることだろう。原作では家族の中で中心人物だったからな。ああ、違う。まだ、だったではない。これからだったに変わる。

「私は坂本真奈。いっちゃんと呼んでいい？」

「いっちゃん？」

「貴方のあだ名、一護だからいつちゃん。駄目？」

「ダメじゃないけど、女の子みたいだもん」

むすつと、拗ねた表情をする少年。

仲良くするにはあだ名をつけた方がいいと思っていたが、どうしようか。まあ、こういう時は適当な言い訳に限るか。

「……………貴方の一護って名前、格好良い」

「ほ、ほんと?!ほんとにそう思う?!」

嬉しそうに詰め寄ってくる黒崎一護。私は彼を一瞥し口を開く。

「本当。…貴方の名前は格好良いから、あだ名をつけたくなったの」

我ながら何を言おうとしてるのかさっぱり分からない。大体これぐらいの子供はこんな意味不明なことを言っている気がする。気がするっていうより、前世の子供がそうだったから。〃煽てて他者を支配下に置く〃、あの頃は馬鹿にしていたが今になりどれだけ役に立っているのかよくわかる。相手を油断させ、貶めるためにはとても貴重な手。ほんと、称賛ものだ。

語尾に『の』を付けることについては、普段の喋り方とは若干異なっ
て違和感しかない。たっちゃんが驚きすぎて口をぽかんと開けてる。
なんとまあ、滑稽な表情。

「うん!!オレのこと『いつちゃん』でいいよ!よろしく!!まなちゃん
!!」

.....。

.....。

「どうしたの？まなちゃん」

「っ………なんでもない。ねえ、いつちゃん」

「なに？」

「なにして遊びたい？ たつちゃんが待ちきれなくてイライラしてるよ」

隣を見るとこめかみをピクピク痙攣させているたつちゃん。そんな若いうちからストレス溜めていたら若いうちから白髪がたくさん見つきりそう。可哀想に、

「あんたたち、あたしのこと忘れてたでしょ」

頭にツノが見えるのは幻覚？ 目を吊り上げたつちゃんが私と黒崎一護、……いっちゃんを捕まえてボコボコにしようとしている。完全にキレてる。いっちゃんが一步後退り襲いかかってきたたつちゃん。私は服を掴もうとするたつちゃんの腕を避けた。いっちゃんはワタワタしながらも逃げている。私といっちゃんを追いかけるたつちゃんは無理があると判断したのか、捕まえやすそうないっちゃんに狙いを定めた。

こつち来るなよ、たつきちゃん！と騒ぎながらも懸命になって逃げ惑ういっちゃんと、それを待て一護！、と言いながら追うたつちゃんを眺める。

(……驚いた、)

心に呟かれた言葉。

途端に、前世の記憶の一部が鮮明に蘇ってきた。

そんな関係のない事、なぜ今思い出すのか

私が幼く知を求めていた頃

周囲を気にする余裕など全くなく、全てを知りたいと思っていた

探究心だけが湧いて己の本能のままに行動していた

どんな評価を受けようが、どんな風に見られようと、他人からのそ

れは私にはどうでもいいことでしかなかった
だからなのか、あの時の言葉は私に深く突き刺さった

「……………お願いだから、

笑ってよ、

泣いてよ、

怒ってよ、

悲しんでよ、

なんでずっと無表情なの?!

あんたは私の■■■じゃない!!

なんでっ、

なんであんたが私の■■■なのよ!!

あんたみたいな気持ち悪い子、産まれなければよかったのに!!」

「……………思い出す事はもう無いと思っていたが、」

一字一句、違えることなく頭に刻み込まれた言葉。脳に、魂に、身体に、深く刻まれていた

壊れていく母親を前に、何も感じなかった、感じる事ができなかった。私にとって母親は産みの親というだけで、人間が死ぬことは自然の摂理で、それだけだ。それ以上でもないしそれ以下でもない。

「……まなちゃん？どうしたの？」

「大丈夫か？坂本」

気がつけば心配そうな表情で見てくるたつちゃんといつちゃん。過去の光景はもう過去だ。今更、どうでもいい出来事に過ぎない。存在を否定されようが、拒絶されようが、どうでもいい。

大事な今は今だ

「なんでもないよ。さ、遊ぼう 何して遊びたい？」

私はたつちゃんといつちゃんと一緒に暗くなる夕方まで遊んだ。